

じかん／ばしょ／ひと [吉祥寺と井の頭公園から生まれたフリーペーパー]

PARKS

準備号
vol,0

パークス



映画をつくります。

吉祥寺と井の頭公園から 生まれた映画

PARKS パークス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ

2017年春 テアトル新宿他にて全国公開

製作: 本田プロモーション BAUS 製作プロダクション: オフィス・シロウズ

配給: boid 宣伝: VALERIA



井の頭公園(1979年) 撮影: ちかみスタジオ・鈴木育男

始まりは1本の電話からでした。

閉館した吉祥寺の名物映画館「吉祥寺バウスシアター」のオーナー、本田拓夫さんからの。

「吉祥寺と井の頭公園の映画を作りたいんです」と本田さん。

映画館は閉館したけれど、映画への思い、

街への思いは消えてはいない。

映画館の終わりを映画の誕生のきっかけにできたら。

そんな思いから『PARKS』は生まれました。

『PARKS』は、街と公園の映画です。

吉祥寺という街や井の頭公園が主役と言ってもいいかもしれません。

そこに集い、その空気を呼吸し、それぞれの時間を生きる人々の、
さまざまな過去や現在や未来が詰め込まれた映画。

登場人物たちは今まさに吉祥寺に住み

井の頭公園を散歩している人でもあり、

かつてそうした人でもあり、

あるいはいつかそうなるかもしれない人たちであるはずです。

人々の思い出や未来が、そこに集まることになるでしょう。

映画もまた、その中のひとつにすぎません。

わたしたちの中の記憶でもあり未来でもある映画になってくれたら。

そんな思いから、この映画はスタートします。

また、映画の中の公園にはいつも、音楽が流れているはずです。
目に見えないものや、記憶や未来の風景が音となってそこに流れ込んでくる。
時間を自由に駆け巡る音楽たち。
今の井の頭公園や吉祥寺を映した映画でありながら、
それらの音楽の運ぶさまざまな時間が、
わたしたちの「今」を大きく膨らませてくれることになるでしょう。
見えないけれどもわたしたちは記憶や未来とともに生きている。
音楽が語るそんな広がりやを、「PARKS」と呼んでみたいと思っています。
わたしたちはひとりで生きているのではない、
1本の映画は1本の映画として孤独に存在しているのではない。
これから次々に生まれるはずの、
あるいはすでにいくつも作られているはずの
「PARKS」の中の1本として、この『PARKS』は作られるはずです。
そしてまたこのフリーペーパーも、
そんな「PARKS」のひとつとなるはずです。

『PARKS』は井の頭公園が100歳を迎えるころ、来年春に公開予定。
それまでこのフリーペーパーも隔月で発行されていきます。
「PARKS」に集まるいくつもの声を、
伝えることができたらと思っています。
そしてまた、それらがさらに「PARKS」を広げていくことができたらと思っています。



撮影：瀬田なつき



バウスシアター（2013年）

本田拓夫インタビュー

おわりと、 はじまりのとき

——バウスシアターの閉館と井の頭公園100周年が運命的に
結びついた

バウスシアターが無くなる時に、なんとなく心の片隅に考えていたことがありました。閉館を沢山の人が惜しんでくれたのは有難かったですけど、バウスだけが特別に吉祥寺の文化的な拠点じゃないのかな。無くなったらまた誰かが作ればいい。また新しいものが作られるだろうという気持ちが何処かにありました。

それで閉館してからしばらくは後処理に追われていて、何も考える暇もなかったんですけど、それがひと段落して、ふっと吉祥寺って町を客観的にみれるようになったんです。それまでは完全に吉祥寺の中で商売してましたから。そうすると、吉祥寺に限らずですが、町はやはりどんどん商業路線で進んでいるという、その流れがはっきりと見えてきます。それを横でみていて、本当にそれだけでよいのかな？と改めて疑問を感じてきました。

そんなことを考えていた時に、2017年が公園100周年だってことが繋がったんです。運命的に感じました。そうだ、吉祥寺には公園っていう魅力的な人が集まる拠点があったじゃない！公園でなにかやれないかなって考えたのが今回の企画のきっかけです。

——井の頭会館という場所が私の原体験になっています

バウスシアターの前身、武蔵野映画劇場を建て直すという時に、そこは映画館が映画だけじゃなくて音楽を演奏する場所や、演劇ができる場所であってもいいじゃないという風に思って、当時まだ生きていた兄と一緒にほとんど手作りみたいな感覚で、バウスシアターを造りました。何か人が集まる文化的な場所がないといけないという気持ちかどこかにあったと思うんです。

それはさかのぼると、私が子供の頃のことで、井の頭会館という施設がありました。そこは、娯楽が全くなかったような時代、私が生まれるずっと前の大正14年に、この辺の名士が集まって娯楽所のようなものを作ろうという話になって、100人



に声をかけて共同出資して作った場所なんですね。そこでは、浪花節ですとか生興行をやっていたんですが、時々映画もかけていました。当時はまだ無声映画をやっていたんですが、それがトーキーになって、来るお客さんがぐんと増えてきたんですね。娯楽に飢えていた人々が駆け付けました。

うちの先代はそれでようやく起死回生して、やる気になった。私や兄はその生き様や場所をみてうちに、映画館もすごく面白いなって思うようになったんです。言わば原体験ですね。ものを売ったり、買ったりするのも重要なことだけれど、娯楽や文化というものが町にないといけないというのは、どこかに刷り込まれていたんだと思います。



——“公園のある町”吉祥寺の魅力を再発見して欲しい

井の頭公園で、みなさん吉祥寺だと思っているかもしれないけれど、実は敷地の大部分が三鷹なんです。だから今回の100周年のお祭りは三鷹、吉祥寺、東京都が合同で執り行うことになっています。これだけ長い歴史のある公園で、色々な人々の沢山の思いが籠められている場所の、100年を祝うお祭りで、その公園が舞台になる映画を作って、みなさんに観てもらおう。そこで改めて、公園の持つ魅力、文化というものの豊かさを知って欲しいと思っています。公園を愛する人たちに、改めてその魅力を感じてもらえるように。そして、吉祥寺や公園にあまり来たことがない人にも、行ってみたいと思ってもらえるように。

それが“公園のある町”吉祥寺の本当の発展につながると私は信じています。

本田拓夫(ほんだ・たくお)

吉祥寺に初めてできた娯楽施設であり映画館の「井の頭会館」に務めた父が、1951年に武蔵野映画劇場を設立。その後を受けて兄(耕一)とともに「吉祥寺パウスシアター」を1984年にオープンした。パウスシアターは映画だけではなく、演劇、音楽ライブ、落語などの上演も織り交ぜながら、吉祥寺の文化の中心として多くのファンを集めたが、2014年閉館。2016年、映画制作のために「株式会社本田プロモーションBAUS」を設立した。

『吉祥寺パウスシアター 映画から船出した映画館』

2014年5月末に惜しまれながら閉館した吉祥寺パウスシアター。映画、演劇、音楽、落語……おもしろいことはなんでもやろうという無謀なコンセプトをもって誕生した映画館の、航海の記録。劇場関係者達による証言と貴重な資料群によって、吉祥寺パウスシアターの歩みをたどります。

B5判変型／並製／192ページ／定価：1,500円＋税

ISBN: 978-4-9904938-7-5



なつかしの 吉祥寺

撮影：らんスタジオ・鈴木育男



吉祥寺駅北口
1966年





公園みたいな 自由な映画

この人たちが
映画をつくります。

瀬田なつき×樋口泰人×松田広子

Q:まずこの企画が立ちあがった経緯を教えてください。

樋口:バウスシアターが閉館した後の、一昨年の秋くらいに、バウスの本田元社長から電話がありました。その時に「井の頭公園が3年後に100周年を迎えるから、その記念になるような映画を作りたい」と言われたんです。その時に言われたのが“井の頭公園が主役になるような映画”というオファーでした(笑)。そこで監督には、バウスでも上映した『5windows』を撮った瀬田なつきさんはどうでしょう？ という話をしたところから始まりました。

Q:何故、監督は瀬田さんだと思ったのでしょうか？

樋口:公園が主役、というのがポイントだと思いました。公園が無理やり自分の作りたい映画に引き寄せるのではなくて、あくまでも公園が語る物語を浮かび上がらせるような、そんなことができる人がいいなと。ほぼ即決で瀬田さんでした。

瀬田:『5windows』を屋外上映するときに、樋口さんとは吉祥寺をよく廻っていたので、そこから結びつくものは感じていました。

樋口:それで、監督は自身の制作チームをもっているわけなので、一緒に動いていてくれる人として、やはり吉祥寺にも長く住んでいる松田広子さんにプロデューサーをお願いしました。ほとんど同時に連絡していたような覚えがあります。

松田:そこからまた暫く経って、去年のお正月辺りから本当にやるんだ、ということになって、瀬田さんとも久しぶりにお会いしま

した。公開時期はもう決まっているので、そこから逆算して大まかなスケジュール表はその時に出したと思います。全然守られていませんが(笑)。

瀬田:すみません・・・(笑)。

松田:既に一年前からシナハンで吉祥寺を廻ったりもしていました。ゆっくり準備を積み重ねてきた感じで、こういう作り方をできる映画って最近少ないんです。なので、ある意味、時間を贅沢に使って映画作りができていますと思います。

Q:瀬田監督はそのオファーを受けて、まずどんな映画にしようと思ったのでしょうか？

瀬田:最初から決まっていたのは、現在、過去、未来が混在するような話にしたい、それが交錯するんだってことだったと思い



ます。それから色々変わっていましたが、結局はその部分は変わらない形で残りました。

それとイメージとしては、パディムービーみたいな映画です。登場人物が井の頭公園をぐるぐる廻るような、そんな話にしたいなと思っていました。ただ、理由もなく廻っているわけにはいかなから、なんで廻っているのかってところで悩み続けて、今も悩んでいます(笑)。

松田:確か一人は吉祥寺にいて、もう一人は吉祥寺じゃないところから来るっていう設定がありましたね。

瀬田:そうですね。それで二人いると面白いなと。恋愛ものというより、なんかもうちょっとぐるぐる元気に動いていて欲しいと思いました。

Q:この映画は、“井の頭公園”“吉祥寺”ということの他に“音楽”の要素が随分と強くなりそうとお訊きましたが、それはいつぐらいから出てきたのでしょうか？

松田:どこからでしたかね？ そういえば今もやっているんですけど、井の頭公園で“かいぼり”って言って、池の水を抜いて堆積した泥やゴミを出したり池底を干したりする作業をしているんですが、そこから何が出てきたら面白いのかって考えて、レコード盤が出てくるっていうアイデアもありました。

樋口:でも実はレコード盤は沈まないっていうのは後で気付いて、それはそうだっていう(笑)。あと、主役が20歳くらいの女の子なのですが、そのおばあちゃんが出てくるとして、そうすると

おばあちゃんが、今80歳くらいの人で、誰かいるかなあと話していて、なぜかふとオノ・ヨーコの名前がでてきたことがありました。なんとなくですが、ありえなかったジョン・レノンとオノ・ヨーコの物語が浮かび上がってくるというか、そんな映画になると面白いな、なんてことも瀬田さんとも話したんですよ。

瀬田: そうなんですよ。最初はおばあちゃんのイメージに少しとらわれ過ぎていた感じもあって。オノ・ヨーコの名前が出てから、時間軸が広がりました。あと、樋口さんから聞いた、ホワイトアルバムを重ねていく話も凄く面白くなって思っ

樋口: ラザフォード・チャンというアーティストの作品で、ビートルズの「ホワイトアルバム」の初回プレス版を集めて展示したり、そ



井の頭公園(1940年)

れらをスキャンして重ね合わせた作品があるんです。「ホワイトアルバム」のジャケットって真っ白じゃないですか。でも何十年も経ってるんで全然ホワイトじゃなくなってる。黄ばんでいたり、シミができていたり、いたずら書きをしていたりして、どれひとつ同じものがない。でも、それも含めて「ホワイトアルバム」であるっていうのがすごく面白くて。あと、そのレコードの音も100枚分を録音して重ねて聞いてみると、ほこりや劣化でノイズにしか聞こえなくて、わずかに曲が聞こえてくるみたいな、そんな感じなんです。世界中の人の欲望の果てでもあり源泉みたいな感じ。だからそれを聞いてしまうと、もしかしたらこれがもとになってビートルズの「ホワイトアルバム」が出来たんじゃないか、という風にも思えてくる。過去と未来が逆転しちゃうような印象があって、そんな話もシナリオ書いている時にしたよね。

松田: その話を聞いて思うのは、私自身、井の頭公園には子供の頃から行っていましたし、吉祥寺に住みはじめてから、公園で過ごしている時間もあるし、私以外にも色々なひとの色々な思い出や物語がきっとあそこにはあるということ。映画が出来た時に、映る映らないは別にして、そこはかとなく、そういった色々な思い出が滲み出てくるような、そんな映画になればよいと思っています。

樋口: さっきまで打ち合わせをしていたんだけど、それぞれがこのシナリオに対して色々言うじゃない。それが正しいとかじゃない、色々な意見が出てくるのがいいなっていう。

松田: 色々なものが入るようなお話にしようっていうことは、

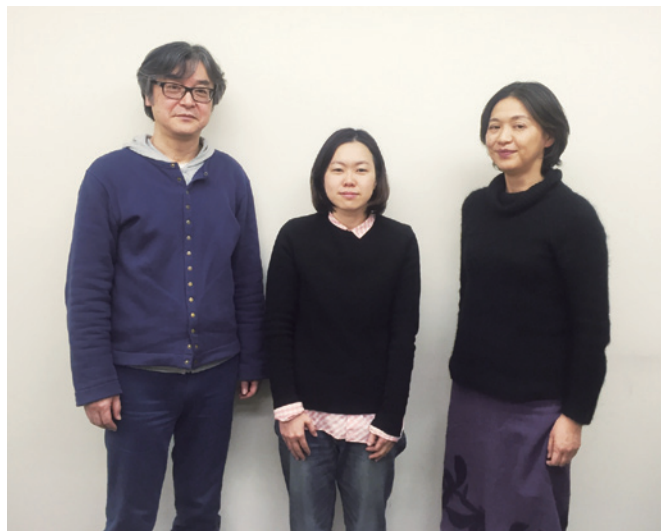
始めから話してましたね。なんというか公園感があるっていうか。

樋口:公園ってそういうところだよっていう。

松田:映画自体が公園ばいというか、みんなの遊び心が刺激されるような、そんな今までにない自由な映画になればよいなと思っています。

瀬田:だんだん自信が無くなってきてますが・・・(笑)。がんばります！

映画の完成に期待しています。ありがとうございました。



樋口泰人(ひぐち・やすひと)

山梨県出身。ビデオ、単行本、CDなどを製作・発売するレーベル「boid」を98年に設立。04年から、東京・吉祥寺パウスシアターにて、音楽用のライブ音響システムを使用している爆音上映シリーズを企画。08年より「爆音映画祭」を開始、パウスシアター閉館後も、爆音上映は全国に広がっている。批評集に『映画は爆音でささやく』がある。

瀬田なつき(せた・なつき)

大阪府出身。横浜国立大学大学院環境情報学府、東京芸術大学大学院映像研究科を経て、大政絢・染谷将太出演作『嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん』(2011年)で商業映画監督デビュー。いきものがかり「ラブソングはとまらないよ」などのMVや、ONWARD「any SiS」のTV-CMや、ダンスロックバンドDISH//主演の『ユア ストーリー』他、ショートフィルムも多数手がけている。

松田広子(まつだ・ひろこ)

東京都出身。雑誌『STUDIO VOICE』『SWITCH』の編集者を務めた後、映画プロデューサーに。プロデュース作品は『おかえり』(篠崎誠監督/1996年)、『カナリア』(塩田明彦監督/2005年)、『恋するマドリ』(大九明子監督/2007年)など。2015年のプロデュース作品『岸辺の旅』(黒沢清監督)は、カンヌ国際映画祭ある視点部門で監督賞を受賞した。

ボランティア
募集!

フリーペーパー『PARKS』の編集や製作、配布を手伝ってくれるボランティアを募集します。映画の宣伝、雑誌作りなどに興味がある方、あるいはちょっと退屈して身体を持て余している方、これから1年間、映画の誕生と公開におつきあいください。

問い合わせ・申し込み  parks100@boid-s.com
お名前、連絡先、志望動機を明記してください。

『PARKS』
配布のお願い

『PARKS』は2017年5月まで、隔月での発行予定の期間限定マガジンです。同名の映画とともに生まれ、ともに語り、ともに成長していきます。この『PARKS』を配置、配布していただける店舗やスペースを募集しています。ご協力願える方、下記までご連絡ください。

 bakuons@boid-s.com

PARKS パークス

瀬田なつき監督作品 音楽監修トクマルシューゴ
2017年春 テアトル新宿他にて全国公開

製作:本田プロモーション BAUS 製作プロダクション:オフィス・シロウズ 配給:boid 宣伝:VALERIA

フリーペーパー『PARKS』
2016年3月31日発行
編集・発行: boid
東京都新宿区住吉町1-11 OSKビル602
☎ 03-3356-4003